

腐葉土づくり

赤玉土の改良

培養土づくり

培養土自作派必見!!



培養土づくりの手順 及び考え方とそのコツ

好気性発酵とリン酸補給及び米ヌカ少なめがコツ

落葉は植物が自らを守る防御機構があり、タンニン酸、フェノール酸など根を褐変させたり、枯れ死させる有害成分が意外と多く含まれています。

落葉を発酵し堆肥化する目的は、これらの有害成分を分解除去し、植物の生育に適正化することにあります。

発酵に当たり重要な事は「好気性微生物による好気発酵」です。すなわち、空気 (= 酸素) を保ちながら発酵することです。発酵の途中では切り返しをし、空気不足にならないようにします。

こうして、手でにぎると葉っぱの形がくずれるようになるまで完熟させます。

そして発酵のスタートをよくする為に米ヌカを添加します。米ヌカにはリン酸やビタミンなど優れた栄養分が含まれていますが、チッ素も含まれています。

その為一定量以上の米ヌカは入れられません。

チッ素過剰により、鉢上げ直後に芽先が枯れたり、根張りが悪くなる場合があります。

腐葉土づくりでは、チッ素分は極力少なくリン酸は十分に補給することが、健全な生育には重要なポイントです。

赤玉土の肥沃化・リン酸の効きめ向上・有益微生物の増殖及び活性化が重要

赤玉土は火山灰土であり、有機物を含まないヤセた酸性土です。

リン酸の吸着固定が激しく、リン酸が効かない!! 元々、植物を育てるのに適した土ではなく、そのまま、培養土に配合しても、良い結果が生まれることはありません。

赤玉土改良の発想はこれら赤玉土の欠陥を改良し使用することで、健全で生育の良い培養土づくりをすることにあります。

「土の素」は有益微生物、有機リン酸、泥炭(腐植)カルシウム、鉄等ミネラルの資材です。

有機リン酸は赤玉土のリン酸吸収を緩和し培養土のリン酸の効きめを高め、根先や芽先などの細胞分裂を活発にし、根の分根・伸長・生育を一段と良くします。

また土中有益微生物のエネルギー源としても作用し、働きや増殖を活発にします。

泥炭は赤玉土を肥沃化し、根が入りやすくし、根張りを良くします。

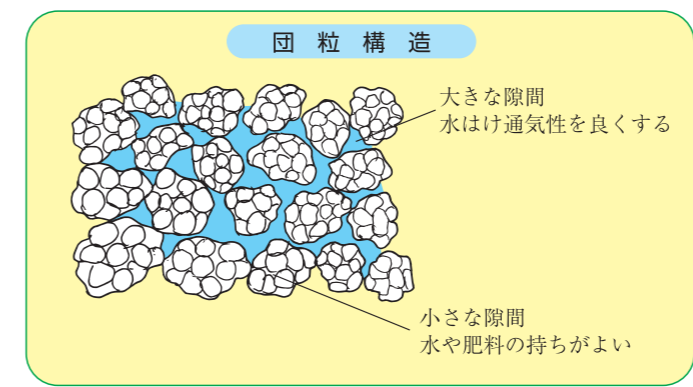
また、同時に培養土の肥沃化を進め、保肥力や保水力も高めます。

有益微生物はアミノ酸、ビタミン、ミネラル、酵素等の優れた栄養分を産出し、培養土に蓄積します。

鉄分は二価鉄イオンを安定供給し葉緑素の生成を高め、光合成を向上させ生育を早めます。

赤玉土の改良は単に欠陥を取り除くのみならず、増殖した有益微生物やその産出栄養分、活性化し吸収しやすくなったリン酸等をそのまま培養土に持ち込み、健全でイキイキと力強い生育をする土づくりが出来ます。

— 赤玉土の改良は培養土づくりの要です —



微生物の働きを活発にし、生育の抜群の土づくり

生育の良い培養土づくりは、「微生物の働き」と「リン酸の効きめ」をいかに良くするかです。

微生物の働きを活発にするには酸素、すなわち通気性が最重要です。(根の働きも同様です) 生命を維持し生長する為には水は不可欠です。すなわち保水力です。

さらに力強く生長する為には栄養分、すなわち肥料を保持する力も必要です。

生育の良い培養土とは通気性、保水力、保肥力など相反する条件が高次元でバランスが取れた団粒構造の発達した土です。

団粒構造は「微生物の働き」が中心になり形成されます。

団粒構造の発達した膨軟な土は細根の発達が良く、肥料や水を吸収する力の強い根ができます。

さらに鉢土全体に緻密な根張りとなり、生育の良し悪しのみならず、「花の大きさ」、「花の色ツヤ」、「弁組」などに大きな影響を及ぼします。土づくりは菊づくりの根幹をなす最も重要な作業です。